

日照不足に対する農作物等管理技術対策について

令和3年 9月9日
埼玉県農林部

熊谷地方气象台から令和3年9月7日に日照不足に関する気象情報が発表されました。

熊谷地方气象台発表によると埼玉県は、8月12日頃から、日照時間の少ない状態が続いており、この状態は、9月7日から1週間程度は続く見込みです。

そこで、日照不足に対する農作物等管理技術対策をとりまとめましたので、参考にしてください。

なお、今後も最新の気象情報に留意してください。

水 稲

- 1 日照不足で深水管理が続くと根の活力は低下するので、落水までは間断かん水や浅水管理（雨を考慮し無理な入水はしない）に移り、根の活力を低下させない。
- 2 いもち病が例年より多い。農薬の使用基準の収穫前日数を遵守し防除する。
- 3 刈取適期は、積算気温だけでなく帯緑籾歩合を見て判断する。
- 4 穂発芽や胴割米等の発生による品質低下が心配されるため、以下の対策に留意し、適期刈取りに努める。
 - 収穫期に到達したほ場では速やかに収穫する。
 - ほ場が軟弱な場合には、水尻を切り暗渠排水の栓を開いて乾燥化を早める。
 - 排水側が高く滞水しやすい場合は、外周に溝を掘るなどして、排水を促す。
 - 収穫期に至る前に倒伏した場合は、速やかに排水しほ場の乾燥を早め、可能な場合には引き起こして、穂の乾燥を早める。
 - 倒伏により熟期ムラを生じた場合は、できる限り刈り分けを行い品質の低下を防ぐ。
- 5 週間天気予報等に注意し計画的に作業を行う。
- 6 ほ場が軟弱な場合は、コンバインのこぎ胴に適切な流量を確保できる程度に作業速度を遅くし、高刈りで泥の混入を抑える。
- 7 高水分籾は収穫後速やかに乾燥機に張り込み、放置することなくできるだけ早く送風を始め、5～6時間以上してから火力乾燥を行う。

大豆

- 1 茎葉が軟弱になると頻繁な降雨で葉焼け病、多湿になるとべと病、紫斑病などの病害の発生が助長されるので、必ず防除する。
「里のほほえみ」はべと病が発生しやすいため注意する。
- 2 降雨による滞水を防ぎ、ほ場の乾燥を速めるために、排水路の点検、再整備を行う。
- 3 「里のほほえみ」は難裂莢品種であるが、登熟後期の雨は莢内で腐敗粒が発生するので、成熟期に達したら早めに収穫する。

そば

- 1 降雨による滞水を防ぎ、ほ場の乾燥を速めるために、排水路の点検、再整備を行う。

野菜

◎露地なす

- 1 日照不足下では果実肥大の遅れや着色不良が生じやすくなるので、受光態勢が良好となるよう整枝・誘引、摘葉管理を適切に行う。また、形状不良果や病果を早めに摘果するなど草勢維持と品質確保に努める。
- 2 多湿状態が続くと褐色腐敗病、低温・降雨が続くと灰色かび等の発生が懸念されるので、早期に病果の摘除を行うとともに、適切な薬剤防除を行う。

◎いちご

- 1 日照不足による軟弱な苗は、定植期までうどんこ病等の発生に注意し、早期発見、早期防除に努める。
- 2 晴天の日中を除き遮光資材の被覆は除去し、できるだけ光線をあて徒長しないよう苗を育成する。
- 3 品種によっては、低温・日照不足が花芽形成に影響するため、定植時期に注意する。

◎抑制きゅうり

- 1 日照不足下では根張りが悪く、軟弱徒長の生育となりやすいので、施設の換気に努めるとともに、少量かん水により適切な土壌水分管理を心がけ、根の活性を高める。晴天時は急な高温・強日射によりしおれや葉焼けを生じやすくなるので、遮光資材の利用や葉水を行い急激な蒸散を抑制する。
- 2 うどんこ病、べと病、褐斑病等が発生しやすい条件なので、ハウス内の換気通風に努め、早期発見に努めるとともに予防防除を行う。

◎ねぎ

- 1 低温・降雨が続くとべと病・黒斑病、低温が解消すると軟腐病・白絹病が発生しやすいので、早期発見と定期的な薬剤防除を行う。
- 2 さらに低温が継続すると小菌核腐敗病・黒腐菌核病の発生を助長するため、土寄せ前に必ず薬剤防除を行う。

◎ブロッコリー、キャベツ

- 1 定植済みのほ場では、ほ場が乾き次第早めに中耕を行い、土壌の通気性を確保する。
- 2 育苗中の苗は、苗床やセルトレイ内の土壌の適湿が維持されるよう不必要なかん水を避け、根群の発達を促進する。
- 3 多湿によりべと病・黒腐病の発生が懸念されるので、薬剤防除を行う。

◎こまつな・ほうれんそう等の軟弱野菜

- 1 日照不足下では葉色が淡く軟弱な生育となり、日持ち性も低下しやすいので、防虫ネット等で被覆しているものは、通風を図るとともに、収穫5～6日前に被覆資材を除去し光線を当てて、収穫後は速やかに予冷するなど品質保持に努める。
- 2 こまつなやみずなでは白さび病、ほうれんそうではべと病の発生が懸念されるので、ハウスやトンネルの通風を良好にするとともに、発生前から薬剤防除を行う。

果 樹

ほ場が湛水している場合は、溝掘りなど速やかな排水対策を講じ、根の活力を低下させないように努める。

◎なし

- 1 低温や降雨により黒星病の発生が懸念されるので、10月から落葉直前まで、秋防除を計画的に実施する。

◎ぶどう

- 1 ぶどうでは収穫前に糖度や酸抜けの程度を食味調査し、適切な品質になってから収穫を開始する。

花植木

- 1 施設栽培では、晴天時の葉焼けを防止するため、光量に応じてきめ細かく遮光資材を開閉する。また、多湿条件にあるため施設の換気を十分に図る（可能な場合は循環扇を24時間利用する）。
*根の活性が低下している場合は、晴天時に急激な換気をするると返って葉焼けを助長することもあるので注意する。
- 2 草勢が弱い場合は液肥等の葉面散布を行い、草勢回復に努める。
- 3 日照不足下では灰色かび病やべと病、さび病（キク類）等が発生しやすく、今後高温になると炭そ病や苗立枯病等の発生も懸念されるため、発生状況に応じて薬剤防除を実施する。罹病した茎葉や株は感染源となるので、早期にほ場外で処分する。
- 4 軟弱な生育をしている場合は薬害を生じやすいので、薬剤防除を行う際には登録の範囲内で薬液濃度を低めにする等の配慮をする。

茶

- 1 秋芽伸長期に日照が少ないと、手摘み園を中心とした新芽にチャノホコリダニが多発しやすい。本虫が多発すると葉裏がコルク状になり硬化し、生育が止まってしまう。発生が多く認められる場合は薬剤散布を実施する。

◎農薬はラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を十分確認の上、最終有効年月までに使用してください。

◎農薬の使用に際しては、以下のホームページで御確認ください。
農林水産省 農薬登録情報提供システム
<https://pesticide.maff.go.jp/>